

項目	著者	年 代	雑誌 名	巻(号)	ページ	タイトル	特性	対象	性 別	年齢(範囲)	身長	体重(kg)	BMI	人数(開始時～終了時)	種類	強度	
血圧	Young DR, Appel LJ, Jee S, Miller ER 3rd	1999	J Am Geriatr Soc	47	277-84	The effects of aerobic exercise and Tai Chi on blood pressure in older people: results of a randomized trial.	60～80mmHg, SBP130～159、DBP90～120mmHg、週当たりの激しい運動時間が10分以下	男 A:67±0.79、女 TC:66±5.1	男 A:67±0.79、女 TC:66±5.1	E1:52.2±2.2、E2:47.2±2.2	A:31.0±4.3、TC:31.3±3.0	A:31.0±4.3、TC:31.3±3.0	A:エアロビックが運動、TC:Yang styleの太極拳	A:40～60%heart rate reserve, TC: A:40～60%heart rate reserve, TC: TC:82.1 TC:30.2±13.9	40	自転車エルゴメーター+ウォームアップ+クールダウン	最大負荷のE1は20%（最大心拍数の68.7%）、E2:60%
血圧	Moreira WD, Fuchs FD, Roberto JP, Appel LJ	1999	J Clin Epidemiol	52	637-42	The effects of two aerobic training intensities on ambulatory blood pressure in hypertensive patients: results of a randomized trial.	60～80mmHg, SBP130～159、DBP90～120mmHg、週当たりの激しい運動時間が1ヶ月以上停止	男 E1:52.2±2.2、女 E2:47.2±2.2	男 E1:28.9±6.5、女 E2:26.1±4.8	各14人	E1:28.9±6.5、女 E2:26.1±4.8	E:55.4±46.4、C:24.2±4.0、E:32.8±14.5、C:94.0±17.3	E:55.4±46.4、C:24.2±4.0、E:32.8±14.5、C:94.0±17.3	E:自転車エルゴメーター+歩行、W:運動に加えて、LEARNプログラムにより週に0.5～1kgの体重減少	E:40～85%heart rate reserve		
血圧	Blumenthal JA, Sherwood A, Gullette EC, Babyak M, Waugh R, Georgiades A, Craighead LW, Tweedy D, Fenglos M, Appelbaum M, Hayano J, Hannan PJ, Cooper AR, Moore LA, McKenna J, Riddoch CJ	2000	Arch Intern Med	160	1947-58	Exercise and weight loss reduce blood pressure in men and women with mild sedentary hypertension: effects on cardiovascular, metabolic, and hemodynamic functioning.	29歳以上、治療中でなく、正常な体重管理(W):48.5±2.2、E:46.6±1.2、C:47.2±1.8	男 E1:52.2±2.2、女 E2:47.2±2.2	W:93.3±17.7、E:95.4±4.4、C:24.2±4.0、E:32.8±14.5、C:94.0±17.3	W:55.4±46.4、E:54.4±4.0、C:24.2±4.0、E:32.8±14.5、C:94.0±17.3	E:自転車エルゴメーター+歩行、W:運動に加えて、LEARNプログラムにより週に0.5～1kgの体重減少	E:40～85%heart rate reserve					
血圧	Sears DR, Tanaka H, Clevenger CM, Monashan KD, Reiling MJ, Hatt WR, Davy Moreau KL, Desarnio R, Langley J, McMahon C, Howley ET, Bassett DR Jr, Thompson DL	2001	J Am Coll Cardiol	38	506-13	What is the magnitude of blood pressure response to mHg, and what is the effect of a programme of moderate intensity exercise?	50.95±6.2 What is the magnitude of blood pressure response to mHg, and what is the effect of a programme of moderate intensity exercise?	男 C:49.4±8.9、女 Ex:46.2±9.4	C:172.8±8.8、E:174.4±8.1±EX:26.6±5.9.7	C:28.1±12.3、E:28.0±12.3、D:65±10.5	C:42.3±9.4、E:48.4±7.1±EX:26.6±4.3	C:42.3±9.4、E:48.4±7.1±EX:26.6±4.3	通常の生活に30分で50から200kcalになる強度の運動(30分の歩行)を追加する、歩数計と記録をつける。	30分で150から200kcalになる強度の運動(30分の歩行)を追加する、歩数計と記録をつける。			
血圧	Seals DR, Tanaka H, Clevenger CM, Monashan KD, Reiling MJ, Hatt WR, Davy Moreau KL, Desarnio R, Langley J, McMahon C, Howley ET, Bassett DR Jr, Thompson DL	2001	Med Sci Sports Exerc	33	1825-31	Increasing daily walking lowers blood pressure in postmenopausal women.	50.95±6.2 What is the magnitude of blood pressure response to mHg, and what is the effect of a programme of moderate intensity exercise?	女 C:55±1、Ex:53±1	C:165.3±1.3、E:165.8±1.3	C:79.1±7.4、E:81.1±5.9	C:9.0±1.3、E:15.0±5.9	E:18.4±15.0±D:17.4±16.0±10.5	E:歩行、D:減塩(ナトリウムで100mmol/day未満)	E:40～80%			
血圧	Banz WJ, Maiher MA, Thompson WG, Bassett DR, Moore W, Astral M, Tea JC, Wang WH, Chan P, Lin LJ, Wang CH, Tomlinson B, Hsieh MH, Yanq HY, Liu	2003	Exp Biol Med (Maywood)	228	434-40	Effects of resistance versus aerobic training on coronary artery disease risk factors.	運動していない男性、android shaped obesity (WH～0.95 & BMI>27)、メタボリックシンドローム(高血圧、糖尿病、高コレステロールなど)のうちの1つ以上を有する	男 R:48±6、A:47±7	R:70±2 inches 1 b, A:34±4 inches 1 b	R:22.5±2.1、A:14.1±1.1	R:12.8、A:14.1±1.1	R:レジスタンストレーニング R:サブマキシマル、A:予測最大心拍数を用いた8倍の冠動脈疾患に対する効果	R:40～85%heart rate reserve				
血圧	Tai Chi Chuan on blood pressure and lipid profile and anxiety status in a randomized controlled trial.	2003	J Altern Complement Med	9	747-54	The beneficial effects of Tai Chi Chuan on blood pressure and lipid profile and anxiety status in a randomized controlled trial.	治療中でない、運動をしていない男性、界域高血圧(stage 1 or high-normal) 女 S1.6±16.3	男 C:50.5±9.8、Ex:51.6±16.3	C:23.8±2.4、A:23.6±2.2	C:44.3±9.8、Ex:44.3±7.2	C:44.3±9.8、Ex:44.3±7.2	Yang Tai Chi、指導者の動きに従って実施	63.7%予測最大心拍数				

項目	著者	時間(分/日)	頻度(日週)	期間(週)	車	デザイン	エビデンス レベル	研究対象	主な結果	コメント	備考
血圧	Young DR, Appel LJ, Jee S, Reiber JP, Miller ER 3rd	グループでの運動は1回、その他 にも自家での運動をする をすめる	30~45分	12 クラスへの 参加は初期 はAで 90%、TCで 84%が参加 していた	RCT	Level I effectiveness ④	Aでは8.4±3.2、TCでは7.0±2.4mmHgの有意な血圧の 低下を認めたが、グループでの差はなかった。TCはA と同程度の血圧を下げる効果があった。	PWC130の心拍数、血 圧、最大心拍数の変化 1日あたり1.64ml/kg有意 に増加したが、TCでは 0.97ml/kg有意な変化 ではなかった。体重は 両群ともわずかに増加 した。	Aでは最大酸素吸取量; 1日あたり1.64ml/kg有意 に増加したが、TCでは 0.97ml/kg有意な変化 ではなかった。体重は 両群ともわずかに増加 した。	Aでは最大酸素吸取量; 1日あたり1.64ml/kg有意 に増加したが、TCでは 0.97ml/kg有意な変化 ではなかった。体重は 両群ともわずかに増加 した。	
血圧	Moreira WD, Fuchs FD, Reibeiro JP, Appel LJ	40分	3日/週	10 93%の実施	RCT	Level I efficacy ④	24時間の平均血圧はSBPはE1で137.2±14.9から135.2± 12.7~、E2で144.4±13.3、E3で135.2±7mmHgへ低下。大と最小を適用したが、どちらも同様の低下が DBPはE1で92.1±10.0から89.3±7.7~、E2で93.5±5.8から 6.90.6±6.8mmHgへ低下。24時間血圧の低下は主に屋 間の血圧低下による。群による差は有意でない。 CIにおいてWEとEとも有意に血圧低下、WとEの差はな い。Wで7.45±6mmHg、Eで4.44±3mmHgの低下、Cで は0.91.4mmHgの低下。運動は血圧の低下を示した が、体重減少プログラムは運動に追加することで、 効果を増した。	PWC130の心拍数、血 圧、最大心拍数の変化 は血圧の低下と関連し ていた。すべての体力 が向上した(データは しまされていない) 介入後の最大酸素吸取 量とトレッドミルでの運動 走行時間はCに比べ運動 をした群で有意に多く、 WはEより有意に高 い	PWC130の心拍数、血 圧、最大心拍数の変化 は血圧の低下と関連し ていた。すべての体力 が向上した(データは しまされていない) 介入後の最大酸素吸取 量とトレッドミルでの運動 走行時間はCに比べ運動 をした群で有意に多く、 WはEより有意に高 い		
血圧	Blumenthal JA, Sherwood A, Gullente EC, Babak M, Vaugh R, Georgiades A, Craighead LW, Tweedy D, Pengios M, Appelbaum M, Hayano J, Hinderliter A, Cooper AR, Moore LA, McKenna J, Ruddoch C	55分	3~4	6ヶ月	RCT	Level I efficacy ④	C1においてWEとEとも有意に血圧低下、WとEの差はな い。Wで7.45±6mmHg、Eで4.44±3mmHgの低下、Cで は0.91.4mmHgの低下。運動は血圧の低下を示した が、体重減少プログラムは運動に追加することで、 効果を増した。	CIにおいてWEとEとも有意に血圧低下、WとEの差はな い。Wで7.45±6mmHg、Eで4.44±3mmHgの低下、Cで は0.91.4mmHgの低下。運動は血圧の低下を示した が、体重減少プログラムは運動に追加することで、 効果を増した。	CIにおいてWEとEとも有意に血圧低下、WとEの差はな い。Wで7.45±6mmHg、Eで4.44±3mmHgの低下、Cで は0.91.4mmHgの低下。運動は血圧の低下を示した が、体重減少プログラムは運動に追加することで、 効果を増した。		
血圧	Seals DR, Tanaka H, Clevenger CM, Monahan KD, Reiling MJ, Hillitt WR, Davis Moreau KJ, Degasmo R, Langtry J, McMahon C, Howley ET, Bassett DR Jr, Thompson DL	30分以内→40~45分	4→多く	3ヶ月	E1は5.8±1.8 RCT /週 40.4分 /日、70.2% 最大酸素吸 取量で歩行 をした。	Level I efficacy ④	42日うち30日以上の実施で100%実施とすると、コ ンプライアンスは89%であった。多くは歩行により わたって3回の面接によ り高いコンプライアンス が得られた。Cでも研究 に参加することによって 活動量が増加したことが 正味の差を小さくした。	最大酸素吸取量はD、E とも有意な変化はない、 (E:21.3±4.1→22.4± 4.7ml/kg/min、D:20.0±4.5 →20.0±4.3ml/kg/min)	最大酸素吸取量はD、E とも有意な変化はない、 (E:21.3±4.1→22.4± 4.7ml/kg/min、D:20.0±4.5 →20.0±4.3ml/kg/min)	最大酸素吸取量はD、E とも有意な変化はない、 (E:21.3±4.1→22.4± 4.7ml/kg/min、D:20.0±4.5 →20.0±4.3ml/kg/min)	
血圧	Banz WJ, Maher MA, Thompson WG, Bassett DR, Moore W, Ashraf M, Tsai JC, Wang WH, Chan P, Lin LJ, Wang CH, Tonjusson B, Hsieh NH, Yang HY, Liu	R:10回×3セット、 A:40分	R: 3、A: 3	10 コンプライ アンス、 R: 96.7%, A: 96.4%	RCT	Level I efficacy ④	Exでは歩数を5400±100~9700±400へ増加。Cは最初 720±700でExより有意に多くなったが期間中の歩数の 変化はない。12周後Exで(SBP142±2→136±2、mean BP:103±1→98± 2)、24周でSBPはさらに3mmHg低下したが、mean BPは12週と変わらない。CではSBP、mean BPとも変 化なし。DBPはC、Exとも変化なし。Exのうち6名が 止歩癖になつたが、ExではSBP、mean BPとも変 化なし。全休ではSBP DBP、平均血圧とも変化はないが、 DBPが90以上に限るとRで95.0±9.4±5.5、A で95.5±11.0→92.2±6.5mmHgでAでのみ有意な低下を した。	ACSM-CDCが推奨してい る1日に3kmの歩行は血圧 を低下させるのに有効 Exは歩数を5400±100~9700±400へ増加。Cは最初 720±700でExより有意に多くなったが期間中の歩数の 変化はない。12周後Exで(SBP142±2→136±2、mean BP:103±1→98± 2)、24周でSBPはさらに3mmHg低下したが、mean BPは12週と変わらない。CではSBP、mean BPとも変 化なし。全休ではSBP DBP、平均血圧とも変化はないが、 DBPが90以上に限るとRで95.0±9.4±5.5、A で95.5±11.0→92.2±6.5mmHgでAでのみ有意な低下を した。	Ex SBP142.4±8.6→126.8±7.4mmHg (-15.6mmHg)へ有 意な低下、DBP 87.4±8.7→78.6±6.0mmHg (-8.8mmHg)有 意な低下、C: SBP 148.2±8.8→134.6±12.2mmHg変化な し、DBP 86.2±8.4→89.6±7.8mmHg変化なし、運 動群で有意に低下した。	R: レッテクエクステンショ ン、ベンチプレス、ラ ーテル・ブル・ダウン で10RMを153%増 加、A: 運動中のエネル ギー消費を277%増加	

項目	著者	年 代	雑誌 名 (号)	ページ	タイトル	特性	対象	運動	
血圧	Brown SA, Upchurch S, Anding R, Winter M, Ramirez G, Halbert JA, Slagay CA, Finucane P, Withers RT, Hamdorf PA, Andrews GR, Ebrahim S, Smith GD	1996	Diabet es Care	19 613-24	Promoting weight loss in type 2 DMのある肥満者、若齢・食 事・運動・授乳・手術・嚥嚥または 複合の介入、体重減少を測定、Cが ある、	男 女 52 (29~71)	2116(14 標準体重 8~314) の47% (122~ 204%)	文献数89	
血圧		1997	J Hum Hypert ens	11 641-9	The effectiveness of exercise training in lowering blood pressure: a meta-analysis of randomised controlled trials of 4 weeks or longer.	RCT、エアロビクスまたはレジスタンス ストレーニングを4週以上、1980 年 から1995年	文献数29	①歩行、ジョギング、ランニ ング、②自転車(エルゴメー ターを含む)、③自転車と歩 行ジョギング等、④レジス タンストレーニング	
血圧		1998	J Public Health Med	20 441-8	Lowering blood pressure: 1966から1995年4月まで、RCT、血 圧低下のための群別な介入、40歳以 下を対象としたものを除く、26箇以 上の介入	40歳以下	文献数7		
血圧	Kelley GA	1999	Prev Med	28 264-75	Aerobic exercise and resting blood pressure among women: a meta- analysis.	randomized、エアロビクスを実施、 Cあり、血圧測定、18歳以上女性、 英文、1996年1月～1998年1月 性	E:68± 6.9, C:72±9.0	文献数10	
血圧	Kelley GA, Kelley KS	2000	Hypert ension	35 838-41	Progressive resistance exercise and resting blood pressure: A meta-analysis of randomized controlled trials.	RCT、漸増負荷のエアロビクス トレーニング、18歳以上、英語、1966 年 から1998年12月、安静時血圧測 定、4週以上	E:17.3± 6.2, C:169.3 ±8.8	E:75.2± 11.4, C:74.3± 12.6	
血圧	Kelley GA, Kelley KS, Tran ZV	2001	Prev Med	33 120-7	Walking and resting blood pressure in adults: a meta- analysis	E:47.2±20.9, C:47.4±20.8	E:26.1± 2.5, C:25.7±2.9	レジスタンストレーニング RMの35±7 (30~90) 、10±3 (6~14) 回、4~50回×2±1 (1 ~4) セット	
血圧	Kelley GA, Sharpe Kelley K, of A Biol Sci Med	2001	J Geront ol A Biol Sci Med	56 M298- 303	Aerobic exercise and resting blood pressure in older adults: a meta- analytic review of randomized controlled trials.	男 E:68±6、C:69±6 女 E:68±6、C:69±6 50歳以上、英文誌、1966年1月～ 1998年1月	E:166.0± C:58.7±9.7	E:25.2± 5.7, C:25.3±1.4	歩行 最大酸素摂取量の45~86% (63)±11%

項目	著者	時間(分/日)	頻度(日/週)	期間(週)	追跡	デザイン	エビデンス レベル	Efficacy/Effe- ctiveness	研究対象	主な結果	コメント	備考
血圧	Brown SA, Uphamchuk S, Andung R, Winter M, Ranuvez G					Meta- analysis	—	—	—	食事制限のみではSBP、DBPとともに有意に低下、生活運動単独では、どの指導器も餐食ではSBPが、食事+運動ではDBPが有意に低く、どちら効果は小さいが、食事ののみでは体重は-3.4kgの有意な減少をした。運動のみでは体重は-3.4kgの有意な減少をした。運動のみでは体重は-3.4kgの有意な減少をした。食事や生活習慣改善に加え、血圧は変化なし。		
血圧	Halbert JA, Shaggy CA, Flinucane P, Withers RT, Hamdorf PA, Andrews GR, Ebrahim S, Smith GD					Meta- analysis	—	—	—	エアロビックな運動ではSBPが4.7 mmHg、DBPが3.1 mmHg低下、運動強度、頻度による差はない。エアロビクスでは小さいが有意な低下がある。レジスタンストレーニングでは有意な効果はみられないが、研究が規模が小さく、少ないと述べる。		
血圧	Kelley GA	10~60分 (39±12.9) 、特運動時間 1.0)	1.85±5 (4±25±17)	53~91% (78±10.6%)	Meta- analysis	Level 1	—	—	—	SBPで2%、DBPで1%の正味の低下 (SBP:2±2.6mmHg、DBP:1±1.9mmHgの低下) 。小さいが有意な安静時血圧の低下が認められた。		
血圧	Kelley GA, Kelley KS	38±14 (20~60) 、 3±1 (2~5) 30)	14±6 (6~30)	~38 (19±14) 、 C:3 drop out E:0 E:18±2 (0~58) %、 C:11±13 (0~38) %、 コンプライアンス(19)	Meta- analysis	Level 1	—	—	—	SBPで2% (3.3mmHg)、DBPで4% (4.4mmHg)の低下、20%の人が140/90mmHg以上なので、高血圧者のデータが必要		
血圧	Kelley GA, Kelley KS, Tran ZV	28~60分 (42±12.00~8584分 (3587±2197分)	2~5日 (4±1)	93% (85~91%) ±12) (87±3%)	Meta- analysis	Level 1	—	—	—	SBP、DBPとも約2%の有意な低下と血圧の低下には体重減少とは独立していた。		
血圧	Kelley GA, Sharpe Kelley K	40±11 (25~60)	3±1 (2~5)	35±16 (16-52) drop out‡ E:7±15 (0-37) %、C: 2±10±7 (0-37) %	Meta- analysis	Level 1	—	—	—	小さいが有意なSBPの低下 (2%) があり、DBPの変初期のSBPとSBP低下に変化(1%) は有意でない。初期のSBPとSBP低下には有意な相関がある。すべての研究がASCMのガイドラインにそついていた。		

項目	著者	年 名	雑誌 名	卷(号)	ページ	タイトル	特性	対象	性 別	年齢(範囲)	身長	体重(kg)	BMI	人数(開始時～終了時)	強度	運動
血圧	Fogard RH	2001 Med Sci Sports Exerc	33:484-92	Exercise characteristics and the blood pressure response to dynamic physical training	1998年8月以前のもの、RCT、4週以上、正常血圧および高血压者、冠動脈疾患の人を適切に排除、Cあり、	男性 median 44 (21~79) 女性 median 44 (21~79)	歩行・ジョギング・ランニング最大能力の30~87% (median 69%、自転車が50%、65%)、最大能力は最大吸気換氣量が3%、その他は23% 放量、最大仕事量、心拍数 reserve、最大心拍数	文献数44								
血圧	Whelton SP, Chin A, Xin X, He J	2002 Ann Intern Med	136:493-503	Effect of aerobic exercise on blood pressure: meta-analysis of randomized controlled trials.	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動	有酸素運動
脂質代謝	Okura T, Nakata Y, Tanaka K	2003 Obes Res (9)	11:9	Effects of exercise intensity on physical fitness and risk factors for coronary heart disease.	90名の34~66歳の女性、食事制限のみ35名、食事制限+ウォーキング22名、食事制限+エアロビ33名	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	食事介入のみ、食事+ウォーキング、食事+エアロビクス	
脂質代謝	Nieman DC, Brock DW, Butterworth D, Utter AC, Nieman CC	2002 J Am Coll Nutr	21(4):50	Reducing diet and/or exercise training decreases the lipid and lipoprotein risk factors of moderately obese women	25~75歳の肥満女性。22名の対照、食事制限のみ26名、運動のみ21名、食事制限+運動22名	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	食事：1日1200~1300Kcal、運動：週5日、HRmaxの60~80%、12週間	
脂質代謝	Kuller LH, Simkin-Silverman LR, Wing RR, Meilahn EN, Ives DG	2002 Circulation	103:32~37	Women's Healthy Lifestyle Project: A randomized clinical trial: results at 54 months.	275名の対象女性と 260名の介入女性。平均年齢両群47歳	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。	4.5年間のLDL上昇、体重増加を予防し、余暇時間運動を増加させる指導。1週間に1000~1500Kcal運動を実施。
脂質代謝	Schuit AJ, Schouten EG, Miles TP, Evans WJ, Sarris WH, Kok FJ	1998 Int J Obes Relat Metab Disord	22(9):53	The effect of six months training on weight, body fitness and serum lipids in apparently healthy elderly Dutch men and women.	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類	229名の60~80歳の高齢男女。対照群と、様々な運動群とに分類

項目	著者	時間(分/日)	頻度(日/週)	期間(週)	追跡	デザイン	エビデンス レベル	Efficacy/Effe- civeness	研究対象	主な結果	コメント	備考
血圧	Fagard RH	42は30~60分、2回は1~7 15分、ウォームアップは13回、39は 3~5回) ブヒクールダンンを 除くとmedianは40分	1~7 15分、ウォームアップは13回、39は 3~5回)	median 16/4 median 1/3 median ~32	—	Meta- analysis	Level 1	—	—	全体での正味の変化は3.4/-2.4mmHgで有意な低下。エビデンスのカテゴリー 正常血圧者では-2.6/-1.8mmHg、高血圧者では-7.4/-5.8 mmHgと認められる結果は以 mmHg。すべての研究をあわせて後対した場合、運動は血圧を低下させ、そ 運動の強度、頻度と血圧の低下の関係は有意でなく、動脈血圧を低下させ、そ れらつきの9%、DBP低下のばらつきの1.1%しか説明 高血圧者で頗著である。・運動強度が最大能 力の40~70%では強度に 比較したものを見ても一定した結果は得られていない。 トレーニングによるエネルギー消費量は363~ 1860kcal/wkであったがエネルギー消費量と血圧の低 下量には関連がなかった。	—	—
血圧	Whelton SP, Chun A, Xin X, He J	—	—	—	—	Meta- analysis	—	—	血压低下は、すべての研究をまとめると-3.84/- 2.58mmHg。特定された運動での実施のみにすると: 4.13/-2.65mmHg	エアロビックダンス運 動群が効果が大きかつ た。運動強度が高いか らかも。 VO2max(2.8, 4.2, 5.9), 腿伸展筋力 (4.5, 2.1, 8.4)	—	
脂質代謝	Okura T, Nakata Y, Tanaka K	—	—	—	—	RCT	Level 1	Efficacy	⑤	LDL(DO:-13, DW:-12, DA:-19), FPG(-7, -12, -18)	エアロビックダンス運 動群が効果が大きかっ た。運動強度が高いか らかも。 VO2max(E.2.018→ 2.303, D+E.1.995→ 2.157, P<0.001)	—
脂質代謝	Niemann DC, Brock DW, Butterworth D, Uitter A,C, Niemann CC	—	—	—	—	RCT	Level 1	Efficacy	⑤	TC(C.5.12⇒5.10, DO.5.37⇒4.84, E.5.62⇒5.65, D+E.5.34⇒4.70, <0.001), LDL(C.3.37⇒3.19, DO.3.34⇒3.01, E.3.58⇒3.49, D+E.3.49⇒2.96, =0.005), TG(C.1.57⇒1.81, DO.1.63⇒1.44, E.1.64⇒ 1.77, D+E.1.54⇒1.29, <0.01)	肥満女性では運動だけ では血中脂質は改善で きない。食事と運動の 両方の介入が必要。 VO2max(E.2.018→ 2.303, D+E.1.995→ 2.157, P<0.001)	—
脂質代謝	Kuller LH, Srinivasan SR, Silberman LR, Wing RR, Mcilahn EN, Ives DG	—	—	—	—	RCT	Level 1	Effectiveness ⑤	—	LDL(LI:+3.5mg/dl, C:+8.9), TG(LI:+18.2, C:+29.9, FPG(LI:+1.6, C:+3.3)	中年女性の4.5年の加 齢による血中脂質や血 糖値の増加を、生活改 善指導が抑制する。	—
脂質代謝	Schuit AJ, Schouten EG, Miles TP, Evans WJ, Sans WH, Kok PJ	—	—	—	—	RCT	Level 1	Effectiveness ⑤	—	有酸素運動 (TG:-0.24mmM) 、様々な運動を実施 する群 (TC: -0.32mmM, HDL: -0.15mmM)	運動には高齢者の有意 な脂質改善効果がない。	—

項目	著者	年 名	論 文 番 号	ページ	タイトル	特性	性 別 (後女性)	年齢(範囲)	対象	身長	体重(kg)	BMI	人数(開始時～終了時)	強度	運動	
脂質代謝	Stefanick ML, Nackey S, Sheehan M, Ellsworth N, Haskell WL, Wood PD	1998 New Eng J Med	339 12-19	Effects of diet and exercise in men and postmenopausal women with low levels of HDL cholesterol and high levels of LDL	男性45名、運動のみ43名、食事のみ46名、食事+運動43名、男性：对照46名、運動43名、女性：对照46名、運動43名、男性：对照46名、運動のみ	47名、食事+運動48名	男性	40-85%	運動のみ、運動+食事介入群は指揮員の元で、週3回の各1時間6種類の運動を実施した。その後の進行期は週3回の監視下運動に加えて、家での週当たり16kmのウォーキングかジョギング。	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	
脂質代謝	Dunn AL, Marcus BH, Kampert JB, Garcia ME, Kohli HW 3rd, Blair SN	1997 Prev Med	26(6)	883- 92	Reduction in cardiovascular disease risk factors: 6-month results from Project Active.	235名の男女（116男、119女）。構築された介入106名、生活習慣改善指導16名	男性	50-85% VO _{2max} で20-60分間の運動を週に3-5日間で6ヶ月間実施。生活習慣改善は1日に30分の運動を毎日実施するよう指導	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	
脂質代謝	Niebauer J, Hambrecht R, Velich T, Marburger C, Hafer K, Kreuzer J,	1996 Am J Cardio	1	78 163-7	Predictive value of lipid profile for salutary coronary angiographic changes in patients on a low-fat diet and physical exercise program.	自宅での自転車エルゴメーター運動、最低30分、75%最高心拍数、週2回、1年間	男性	50-85%	構築された介入は、フィットネスセンターでの50-85% VO _{2max} で20-60分間の運動を週に3-5日間で6ヶ月間実施。生活習慣改善は1日に30分の運動を毎日実施するよう指導	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	
脂質代謝	Katzel LI, Blecker ER, Colman EG, Rogers EM, Sorkin JD, Goldberg AP, King AC, Haskell WL, Young DR, Oka RK,	1995 JAM A	274 1915- 21	Effects of weight loss vs. 170名の46-80歳の男性。非常勤の健常で非活動的肥満。彼らを73名の食事制限による体重減少、71名運動介入群は9ヶ月で週3回、45分間の持続的トレーニングを実施した。初期の強度は50-60% HR _{max} 、慣れてからは70-80%に強度を増加。	高強度グループベースの被験者は地域の高齢者センターでインストラクターの指導を2年間受けた。73-88% HR _{max} ウォーキング、ジョギングを60分間で週に3回を目標にした。高強度ホームベースグループは上の運動を自宅で実施した。低強度ホームベースは強度だけが60-73% HR _{max} であったと記載した。	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	
脂質代謝	King AC, Haskell WL, Young DR, Oka RK, Stefanick ML	1995 Circul ation	91 2596- 604	Long-term effects of varying intensities and formats of physical activity on participation rates, fitness, and lipoproteins in men and aged and older women. A 50-65歳の循環器病を持たない中年者。120名の女性と149名の男性。69名高強度グループベース、74名高強度グループベース、74名	高強度グループベースの被験者は地域の高齢者センターでインストラクターの指導を2年間受けた。73-88% HR _{max} ウォーキング、ジョギングを60分間で週に3回を目標にした。高強度ホームベースグループは上の運動を自宅で実施した。低強度ホームベースは強度だけが60-73% HR _{max} であったと記載した。	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	
糖代謝	Haldicci S, Leontici F, Di Maria L, Fulucca F,	2004 Diabet es Care	27(3)	841- 842	Is a long-term aerobic plus resistance training program feasible for and effective on metabolic profiles in type 2 diabetic patients?	50-65歳の循環器病を持たない中年者。120名の女性と149名の男性。69名高強度グループベース、74名高強度グループベース、74名	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性
糖代謝	Sabelis LW, Senden PJ, Te Huizenga HJ, Van De Wiel A, Van Zonderland ML, Mortier WJ, Coutif DJ, Menell GS, Martin A, Grzeskowiak A, Tildesley JI, Freilich JJ	2004 Clin Sci 106(5)	459- 466	Does physical training increase insulin sensitivity in chronic heart failure patients?	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性	最高後女性
糖代謝	Haworth TW, Zonderland ML, Mortier WJ, Coutif DJ, Menell GS, Martin A, Grzeskowiak A, Tildesley JI, Freilich JJ	2003 Diabete s Care	26(11)	2977- 2982	Effective exercise modality to reduce insulin resistance in women with type 2 diabetes	門性後の肥満を伴う2型糖尿病患者	女性	28	①コントロール群、②有酸素性運動群、③レジスタンストレーニング群	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4						
糖代謝	Okura T, Nakata Y, Yamada K	2003 Obes Res	11(9)	1131- 1139	Effects of exercise intensity on physical fitness and risk factors for coronary heart disease	上半身肥満を伴う女性肥満者	女性	22	①49 不明 ±6. ②51±6. ③52 ±6	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4	全休:不 明、①195.6±0.06.7± ±6.5、②33.3± 89.5± 3.9、③32.5±1.4	

項目	著者	時間(分/日)	頻度(日/週)	期間(週)	年齢	追跡	デザイン	エビデンスレベル	Efficacy/Efficiveness	研究対象	主な結果	コメント	備考	
脂質代替	Stefanick ML, Mackey S, Sheehan M, Ellsworth N, Hasell WL, Wood PD				RCT	Level 1	Efficacy	⑤		運動のみでは男女とも変化なし。食事+運動で男女とも変化。女性(LDL:-14 mg/dl, TC:-17.5), 男性(LDL:-20.0 mg/dl, TC:-20.6)		食事と運動両方の介入が効果。		
脂質代替	Dunn AL, Marcus BH, Kampert JB, Garcia ME, Kohl HW 3rd, Blair SN				RCT	Level 1	Efficacy	⑤	TC(S:-0.3 mM, LS:-0.2), TC/HDL(S:-0.3, LS:-0.2)			機器された運動指導ではTC, LDLとともに効果があつた。生活習慣改善でもTCに關しては類似の効果があつた。		
脂質代替	Niebauer J, Hambrecht R, Velich T, Marburguer C, Hauer K, Krenzer J, Katzel L I, Blecker ER, Colman EG, Rogus EM, Sorkin JD, Goldberg AP				RCT	Level 1	Efficacy	④	L DLとTC/HDLが運動介入群が対照群より低下(P=0.04, 0.03).			データが数字で示されていない。		
脂質代替	King AC, Hasell WL, Young DR, Oka RK, Stefanick ML				RCT	Level 1	Efficacy	⑤	食事制限群はTGが-18%, LDL-7%, HDL:+13%と改善した。運動介入群はTGが+5%, HDLが+5%改善した。			運動介入群で体重が減らない人は、食事制限ほど中程度には効果がない。だから、食事制限でも運動でも、体重減少を目的とするべき。		
脂質代替	Baldacci S, Leonetti F, Di Manno U, Fallucca F.	30分やつ	3日/週	52(1年間)	104/120 (87%) RCT	Level 1	Efficacy	④		1年間のARTにより、血清値が16.5±60.6から1.29±37mg dlに、ART群では薬物治療の方他のレーニング効果は観察されず、血漿も有り改善した。コントロール群はFat free mass (FFM)は変化しなかつたが、ART群のFFMは有意に増大した。				
脂質代替	Sabelis JW, Senden PJ, Te Berkhorst BC, Huizenga HJ, Van De Wiel A, Van Hoffen TW, Zonderland ML, Mierendorf WI, Cift DJ, Stenelly GS, Martin A, Ionszewski A, Tildesley HD, Prohjlich JJ,	60分/日	4日/週	26ヶ月	61/77 (79%) RCT	Level 2	Efficacy	④		運動介入群のFFMはPeak V(2分以内)で最大値が得られた。安静時血漿、安静時インスリノン、クランプ試験を認めなかつた。		運動介入群のFFMはPeak V(2分以内)で最大値が得られた。安静時血漿、安静時インスリノン、クランプ試験を認めなかつた。		
脂質代替	Okurn T, Nakata Y, Tanaka K	DW: more than 30 分/ 日, DA: 45 分/日	DW: 毎日, DA: 3日/週	14週間	96/90 (100%) RCT	Level 4	Efficacy	①		すべての群で安静時血漿値は低下したが、その低下率DA群で有意に大きかった。		LDL-Cの変化率はDO群およびDW群で有意に大きかった。		
脂質代替												DO群よりDW群で効果は、のみ有りに大きかった。		

項目	著者	年 誌名 巻(号)	ページ	タイトル	特性	対象	年齢(範囲)	身長	体重(kg)	BMI	人数(開始時～終了時)	種類	運動
筋肉	Pan XN, Li GH, Hu YH, Wang JX, Yang WY, An ZX, Hu ZX, Lin J, Xiao JZ, Cao HB, Liu PA, Jiang NG, Jiang YY, Wang JP, Zheng H, Zhang H, Andersen PA, Hermann I, Urdal F, Turksen PA, Holme I,	1997 Diabetes Care 20(4)	537- 544	Effects of diet and exercise training in people with impaired glucose tolerance. The Da Qing GT and Diabetes Study.	全般・健常者	男 全体:45.0±9.1 女 (25), (34)±5.5 9.3, (24)±7.9, 4.3 44.2±6.7, (44)± 9.2	不明	不明	3.8, (32)±2.8 (90°), (3)13, (2)130, (3) 141, (4)26 32.4±3.1, (32)±1.3	3.8, (32)±2.8 (90°), (3)13, (2)130, (3) 141, (4)26 32.4±3.1, (32)±1.3	①コントロール(飲食制限のみ、弱い運動が可能まで様々 ②運動の24h、少なくとも110min/day ③運動の量と時間の身体活動量 ※測定時に行う。最初の1ヶ月は毎 週、3ヶ月まで毎月、その後月、その後3ヶ月 ごとにカウンセリング、④食事 +運動		
筋肉	1996 J Intern Med 240(4)	203- 209	Improved carbohydrate metabolism after physical training and dietary intervention in individuals with the atherothrombotic syndrome: Oslo Diet and Exercise Study (ODES). A randomized trial.	生化学検査などと比較的不活動な生活を送っている者 →比較的不活動な生活を送っている者	男 全体:(40) 女	不明	不明	Q28.3± 3.1, (2)29.5 49, (4)45 28.6±2.2, (2)28.6±3.4	Q28.3± 3.1, (2)29.5 (93%), (1)43, (2)32, (3) 28.6±2.2, (2)28.6±3.4	①コントロール(飲食制限のみ、エアロビク ス、サーフィン、トレーニング、運動、 ジョギングを行つかれ、⑤食事+運 動)			
筋肉	Katzel LI, Blecker ER, Colman EG, Reaven EM, Sorkin JD, Goldberg AP,	1995 JAMA 273(142 4)	1915- 1921	Effects of weight loss vs aerobic exercise training on risk factors for coronary disease in healthy, obese, middle-aged and older men. A randomized controlled	活発でない 男性肥満者	男 全体:61±(46- 80), (1)61±1, (2)61 ±1, (3)60±1	不明	Q94.3± 1.3, (2) 94.0± 1.5, (3)	Q94.3± 1.3, (2) 94.0± 1.5, (3)	①体質減少群(エネルギー剤 26⇒全休:111(65%)、JR), ②有酸素運動群(体重減 少群), 運動はレッドミルまたは自 転車エルゴメーター③コントロール 群(体重維持)			

項目	著者	時間(分/日)	頻度(日/週)	期間(週)	車	デザイン	エビデンスレベル	Efficacy/Efficacy citiveness	研究対象	主な結果	コメント	備考
傍代群	Pan NK, Li GH, Wang XN, Hu YH, Wang XN, Yang WY, An ZX, Hu ZA, Lin J, Xiao JZ, Cao HB, Liu PA, Jiang XG, Jiang YY, Wang JP, Zheng H, Bennett PH, Andersen SA, Hermann I, Urdal P, Torjesen PA, Holme L.	少なくとも5-30分/週度 不明	6年	530/570 (92%) RCT	Level 5	Effectiveness ③			糖尿病経験者は、食事のみ(3.7)/100人/年)運動のみ(5.3人/100人/年)、および食事+運動の併用(5.5人/100人/年)の群一樣、それもコントロール群が(1.6人/100人/年)に比較して有意に低かった。コントロール以外の群間には有意差を認めなかった。運動群は3.2人/100人/年)に比べて検討すると、食事制限単独群18.3人/100人(5.1人/100人/年)、および食事+運動群6.8人/100人(3.3人/100人/年)に比べて有意にコントロール群が低下した。	糖尿病経験者は、食事のみ(3.7)/100人/年)運動のみ(5.3人/100人/年)、および食事+運動の併用(5.5人/100人/年)の群一样、それもコントロール群が(1.6人/100人/年)に比較して有意に低かった。コントロール以外の群間には有意差を認めなかった。運動群は3.2人/100人/年)に比べて検討すると、食事制限単独群18.3人/100人(5.1人/100人/年)、および食事+運動群6.8人/100人(3.3人/100人/年)に比べて有意にコントロール群が低下した。	コントロール群と食事群の運動量は、それぞれ2.5±1.9および1.7±1.9であったが、運動群は3.2±1.0および3.9±2.3であった。	
傍代群	Katzel LI, Blecker ER, Colman EG, Roous BM, Sorkin JD, Goldberg AP.	30-45分	3日/週	1年	209/210 (95%) RCT	Level 6	Efficacy	④	安静時のインスリン値の変化量は、食事+運動群(-22.6±4.7pmol/l)においてのみコントロール群(3.9±6.2)に比較して有意に低価であった。無負荷安静時インスル-チンの変化量は、コントロール以外の3群でコントロール群と比較して有意に低価であった。安静時の血漿中の全セラミドは、食事および食事+運動群でコントロール群と比較して有意に低価であった。無負荷後1時間の血漿中の変化量はどの群間にも有意の差を認めなかつた。	BMIは食事制限および身体活動トレーニング群に33%で低下したが、併用による効果はコントロール群に比べて3倍でコントロール群と比較して有意に低価であった。安静時の血漿中の全セラミドは、食事および食事+運動群でコントロール群と比較して有意に低価であった。無負荷後1時間の血漿中の変化量はどの群間にも有意の差を認めなかつた。	食事群(6.7±0.1ml/kg/min)に比べてコントロール群はより食事群と比較して運動トレーニング群の効果は、体重減少率に直角的な強大な影響がある。減量率は、2.63±0.05%と7%有効に増加した。他の群は、絶対量およびPIM当たりでも違いを認めなかつた。	
傍代群				9ヶ月	111/170 (65%) RCT	Level 7	Efficacy	④	安静時血糖値、糖負荷時血糖値、および安静時インスリシン活性は運動トレーニング群は、体重運動トレーニング群の最大酸素摂取量は、体重運動トレーニング群の最大酸素摂取量は、2.63±0.05%と7%有効に増加した。他の群は、絶対量およびPIM当たりでも違いを認めなかつた。			

飲酒に関する保健事業（アルコール依存症を除く）

滋賀医科大学福祉保健医学講座

岡村 智教

1. 文献検索の前提としての考え方—集団全体への適正飲酒の普及—

1) ハイリスク・アプローチとポピュレーション・アプローチ

ある集団全体の疾病の発症要因や生活習慣を改善させる手法として、ハイリスク・アプローチとポピュレーション・アプローチがある。前者は、スクリーニングにより集団の中から疾病発症に繋がりやすいハイリスク者を発見し、保健指導を集中的に行う手法である。しかし一般的に母集団に占めるハイリスク者の頻度は多くないため、実際の疾病的発症者数は、ハイリスクではない人達から多く見られ、ハイリスク・アプローチは集団全体の疾病発症者数の減少にはあまり有効でない可能性がある。一方、ポピュレーション・アプローチは、疾病を発症させる背景要因に集団の構成員全員が関わりを持つと考えて、集団の行動を規定している環境要因に介入する手法である。保健事業との関連で飲酒を考える際に、どちらの考え方を主とするかで保健施策の方法論も異なってくると考えられる。

2) 飲酒量と健康影響

飲酒と健康の問題を考える際には、飲酒そのものが健康に害を及ぼすという観点からの考え方（アルコール依存症など）と飲酒が何らかのリスクの増悪要因であるという考え方（多量飲酒は高血圧の危険因子）がある。これは両者ともハイリスク・アプローチの対象として飲酒を捉えるものである。一方、飲酒には2面性があり、主に欧米の研究成績から、適量飲酒者は、全く飲まない人や多量飲酒者に比べて死亡率が低いという“所謂”「Jカーブ効果」が指摘されている。日本人集団を対象とした観察研究でも、循環器疾患については、多くの研究でJカーブ効果を認めている。しかしながら、がん死亡については飲酒量が増えるにしたがって死亡率が高くなるという報告もあり、これらを勘案して、1日純アルコールで20グラムという健康日本21の「節度ある適度な飲酒」という基準値が導き出されている。したがって飲酒に関する保健事業の進め方としては、

①飲酒そのものがリスクになっている者へのハイリスク・アプローチ

アルコール依存症、泥酔による傷害や交通事故など

②飲酒が増悪要因となる危険因子保有者へのハイリスク・アプローチ

高血圧、ウィルス性慢性肝炎（キャリア含む）など

③上記①②に該当しない飲酒者を対象とした、「節度ある適度な飲酒」を目指したポピュレーション・アプローチ

の3パターンが考えられる。

本研究班の目的は、主に市町村や医療保険の保健者等が実施してきた保健事業の評価を文献検索により行うものである。そのため、主に精神保健の領域に該当する①のアルコール依存症関係は検索の対象外とした。また②についても高血圧や高脂血症などの特定の病態を有する者を対象とした研究は対象外とし、問題行動や危険因子を有さない一般の飲酒を対象として文献検索を実施した。

2. 文献検索の経過

1) 用いたデータベース

MEDLINE (PubMed) および医学中央雑誌

2) 用いたキーワード

① MEDLINE (PubMed) : 検索日 2004 年 11 月 5 日

検索条件 : 数字はヒットした文献数

Alcohol drinking (MeSH の上位) : 29,959

→ Age 19+ years: 16,928

→ English, +abstract : 12,652

→ RCT (無作為化比較対照試験) : 770

→ NOT “alcoholism” : 565

→ 最近 10 年 (1995 年 1 月 1 日) : 359 (最終的に確定)

参考までに付記すると最初の検索条件を Alcoholism で設定すると 56,047 件がヒットし、この領域の多くの研究論文が依存症関係で占められていることが判明した。

② 医学中央雑誌 : 検索日 2004 年 11 月 2 日

一方、医学中央雑誌の場合は、RCT の手法を用いた研究がほとんどないことが予想されたため、当初から研究デザインを限定せずに文献を検索した。

検索条件 : 数字はヒットした文献数

飲酒、原著（抄録あり）で 2000 年 1 月 1 日以降: 977

→ AND “保健” : 181

③ ヒットした論文数（上記の合計）

MEDLINE : 359

医学中央雑誌 : 181

④ その後の選定条件

a) MEDLINE の 359 件についてはタイトル、著者名、アブストラクトをすべて読んでチェックし、明らかに「保健事業」と関連が低いものを除外した。

・ 心筋梗塞やがんの患者を対象とした研究 (Secondary Prevention)

・ アルコール依存症の治療を対象とした研究

・ ドラッグユーザーや特定のエスニック（日系人を除く）を対象とした研究

- ・飲酒ではなくアルコール注射による実験研究
- ・遺伝子診断を伴う研究
- ・飲酒がメインテーマではない（単なる調整変数である等）

その結果、

33 件の論文についてフルテキストを取り寄せて内容を吟味した。その結果、前述の選定条件に沿ってさらに選別した結果、13 件の論文についてエビデンステーブルを作成した（別添資料参照）。

b) 医学中央雑誌

ほとんどが断面調査でエビデンスレベルの高いものは少ない。上記と同じ条件で 8 件をリストアップしてフルテキストを吟味した結果、特にエビデンステーブルの作成は行わなかった。

3. エビデンステーブルを作成した論文の概要

論文内容の詳細は個々のテーブルを参照すれば明らかであるが、大別して 2 つのグループに分類される。前述のように今回の検索では、高血圧や高脂血症などの有所見者を対象とした研究は除外したが、健常者を集めて飲酒に対する介入を行い、その血圧や脂質、耐糖能、凝固・線溶系への影響をみた研究が 7 編見られた (Rakic V, Kawano Y, Baer DJ, Davies MJ, Sierksma A, Minami J, ただし Minami J は 2 編あり)。これらは既存の観察研究、すなわち飲酒は、血圧や心拍数を上昇させるが、適量であれば HDL コレステロールや凝固・線溶系、インスリン抵抗性に良い影響を与えるという既存の断面研究や観察研究の結果の確認調査的な内容である。

一方、残りの 6 編は、アルコール依存症ではない対象者の飲酒量そのものをターゲットにした介入研究であり、大学 (Baer JS, Johnsson KO, Neighbors C)、一般臨床の場 (Senft RA)、地域全体 (Wagenaar AC)、職域 (Richmond R) を対象としており、これらのほうが保健事業との関連が強いと考えられる。今後、本邦の疫学研究、公衆衛生学研究として必要なのは後者に属する研究であり、現在進行中の事例も含めてエビデンス構築のために必要な研究について次項で記述する。

4. 保健事業としての飲酒対策—今後の研究や保健事業の方向性

1) 飲酒に関する保健事業の背景

冒頭でも述べたように、保健事業としての飲酒対策には、ハイリスク・アプローチとポピュレーション・アプローチが考えられ、前者は主に a. アルコール依存症やその予備軍である大量飲酒者への対策、b. 飲酒によって増悪する病態（高血圧、ウィルス性肝炎など）を有する者への対策に大別される。a. の依存症対策は保健所等の精神保健領域の対策と重なってくるが、健診等の一般の保健事業では大量飲酒者への対策が最も重要なと考えられる。また b. については、健診で発見された高血圧や肝機能障害を有する対象

者に対して適切な“節酒”指導を実施していく必要があると考えられる。b.については適切なプログラムを提供すれば有効に節酒し得る方法が既に示されており、特に高血圧についてはRCTを含めた研究成果が内外から報告されている（詳細は高血圧の分担領域となるので今回の飲酒の文献レビューでは触れていない）。b.について今後必要とされる知見は「どのような対象者」に節酒プログラムを提供するのかという、対象者の選び出しとどのようにして勧誘を行うかという視点であろう。

一方、a.については明らかな依存症は別として、その予備軍である大量飲酒者で b.に該当しないもの、すなわち大量飲酒者であるが現在、顕在化した危険因子を有さない者への対策ということになり、現状では有効な手法が確立していない。厚生労働省の健康日本21では、1日に純アルコール量で約60グラムを超える場合を大量飲酒と定義しているが、危険因子がなく病識もない者を対象として行動変容を目的とした介入を行うのは極めて困難であろう。

そこで適正飲酒の普及に関してもポピュレーション・アプローチの役割が重要となる。適正飲酒に関するポピュレーション・アプローチとしては、まず適正飲酒の概念を社会全体に広く認知させていくことである。この啓発活動は、飲酒者のみに向けられるのではなく、未成年や非飲酒者を含む社会全体に対してなされなければならない。分煙が進めば、それが社会的な圧力となって禁煙を促進するのと同様に、適正飲酒の概念をみんなが知っている環境では、大量飲酒者を適正飲酒へ向かわせる社会的な圧力が生じると期待される。さらに国民の意識が高まれば、販売している酒類に適正飲酒量換算表示を義務づけたり（「この缶を飲むと適正飲酒量の50%に相当します」等の表示）、アルコールを提供する飲食店で飲料の純アルコール表示をしたりすることも可能になるかもしれない。

今回レビューした文献の約半数は、飲酒の健康影響に関するRCTであり、残りの半数がハイリスク・アプローチ（今回のレビューでは高血圧などの病態を伴う者への介入は除いた）やポピュレーション・アプローチの有効性を検証するRCTであった。飲酒の健康影響については、多くの既存の研究（断面研究やコホート研究、症例・対照研究）の結果を確認するような内容であり、特に新しいと知見を提供しているわけではない。今後の保健事業の展開に資するのは、後者のハイリスク・アプローチやポピュレーション・アプローチの有効性を検証する研究であり、本邦でのエビデンスはほとんどないのが現状である。また飲酒の場合、“健康を害して節酒または禁酒する”場合がほとんどで、禁煙と異なり将来の健康のために節酒や禁酒をする人は少ないため、観察研究で飲酒や節酒の効用を検証することは困難である。ほとんどのコホート研究で、禁酒者の死亡率が非飲酒者よりも高くなるはこのような“因果の逆転”的結果である。したがって飲酒対策についての保健事業の効果を検証するためには介入研究が必須となる。

2) 飲酒に関する研究および保健事業の実例

今回の文献レビューの結果、査読のある論文として、本邦における健常者の飲酒を対

象者とした保健事業については、ほとんどエビデンスがないことが明らかとなった（ここで言う健常者とは、アルコール依存症や高血圧などを持たないという意味である）。そこで査読のない文献や単行本、現在進行中の研究班の報告書等から本邦におけるハイリスク・アプローチやポピュレーション・アプローチの事例を調査した結果、いくつかの事例がリストアップされた。その概略を以下に示す。

- a. 平成15年度厚生労働科学研究費補助金がん予防等健康科学総合研究事業：行動科学に基づく簡便な生活習慣改善プログラムの開発と効果の検討（主任研究者：足達淑子）：分担研究：適正飲酒の行動的介入プログラムの開発と効果の評価（分担研究者：川上憲人、研究協力者：高尾総司）

前述のように高血圧などの危険因子を有する飲酒者ではなく、一般の飲酒者を対象としたハイリスク・アプローチの実例はほとんどないが、上記研究班の成果が研究報告書や学会等で公表されている（1）。本研究では、問題飲酒群ではないが、飲酒習慣のある者を対象として、より楽しい飲酒機会を増やしていくことに着目して、適正飲酒の達成を目指すという新しい試みが行なわれている。この手法の有効性は無作為化比較対照試験の方法で検証されつつあり、最終的には介入群、対照群各100名で評価が行なわれる予定である。対象者は酒造メーカーの勤務者男性で、飲酒習慣はあるが健康面では特に問題がなく、現時点で1日あたりの飲酒量が日本酒換算で1合以上の者である。またプログラムへの参加者以外に、参加者の飲酒記録の確認などを支援するサポーターを参加者自身に選択させている（配偶者の場合が多い）。介入期間は4週間で、毎週、資料2種類と記録表を送付し、記録表の提出や目標達成のそれぞれについてポイントを加算し、目標達成者に記念品を渡すようになっている。

現在、先行的に実施された20人（介入群10人、対照群10人）での成果が公表されている。両群とも1週間の合計飲酒量はあまり変化しなかったが、介入群では、飲酒頻度が増える反面、1回あたりの飲酒量が減少する傾向を示した。また飲酒頻度を分母とした“しまったお酒”的割合をみると、介入群では22.9%から6.7%へ大きく減少したが、対照群では変化を認めていない。なお本研究の前年度に実施されたほぼ同一のプログラムを用いた対照群を置かない先行研究では（対象者は1日日本酒換算で1.5合以上を週の半分以上飲酒している男性26人）、飲酒量についても20%の減少が報告されている（2）。

本研究は、何のリスクも有さず健康増進への意欲の乏しい集団を対象として、適正飲酒へ向けた取り組みを実施した点が画期的であり、特に飲酒の「良い面」に焦点をあてた指導が行われている点に特徴がある。

- b. 厚生労働科学研究費補助金による「青・壮年者を対象とした生活習慣病予防のための長期介入研究（主任研究者：上島弘嗣）」

この研究は、危険因子を有する者だけではなく、全社員を対象として循環器疾患の危険因子の改善を目的とした非無作為化比較対照試験である（3）。ポピュレーション・アプロ

ーチに基づく啓発活動と環境改善を行う重点群 6 事業所と個別保健指導教材のみが提供される教材群 6 事業所が選定され、1999 年～2000 年にかけてベースライン調査が実施され、重点群 約 3300 人、教材群 4000 人がこの研究に参加し、ポピュレーション・アプローチとして、全社員を対象とした栄養、飲酒、喫煙、運動に関する情報提供と関連する環境要因への介入が行われた。

介入群の D 事業所（在籍者数は 570 人）は、この介入研究のベースライン調査で、研究に参加した全 12 事業所の中で非飲酒者を含めた全社員男性の平均飲酒量が最も高く（1 日 純アルコールで 23.3g、全 12 事業所の平均は 18.3g）、飲酒者の平均飲酒量も 1 日 37.1g で第 2 位（全 12 事業所の平均は 31.7g）であることが示された。また男性飲酒者に占める適量飲酒者（1 日 20 グラム以下）の割合は、35.9% と低く、他社の 47.5%～57.5% に比べて低かった。そこでまず適正飲酒に関する知識を普及することが必要と考えられ、本研究で導入された健康情報提供媒体のうち注目度が最も高かった POP メニュー（Point of purchase advertising menu、社員食堂のテーブル上のメニュー立てに提示した健康メモ、本研究では 1 週間ごとに新しいものに交換）を活用した啓発キャンペーンが企画された。内容は非常にシンプルであり、POP メニューに 1 週間、適正飲酒に関するクイズを提示して、キャンペーン期間の最終日に答えを回収し、その際、適正飲酒に関する情報が記載された媒体を参加賞として配布するという内容である。参加賞として“適正飲酒ボールペン”を新たに開発した。これはボールペンの中央部に覗き窓を開け、ボールペン上部のボタンをクリックするごとに、この部分が回転して別の情報を提示するようにしたものである。このボールペンの場合、窓の中身は 6 種類変化するようになっており、“1 日に [エタノール換算 20 g] までが適正飲酒”という表示のうち [] 内が、[日本酒 1 合]、[烧酎 0.6 合]、[ウィスキーダブル 1 杯]、[ワイングラス 2 杯]、[ビール大びん 1 本] とクリックの度に回転して次々に表示されるようになっている。本キャンペーンへの参加者は 348 人在籍者の約 62% であった。翌年の調査では、D 社の男性飲酒者に占める適正飲酒者の割合の絶対値は 42.3% に増加した。この結果を受けて 2004 年に第 2 回目のキャンペーンが実施され、参加率は在籍者の約 88% まで上昇した（4）。今後、その効果を問診票等の分析によって検証していく予定である。

c. 新潟県紫雲寺町の取り組み

地域を対象として一般健常人へ飲酒対策を行った研究はほとんどない。これは職域と異なり地域の場合、対照群の設定や介入効果の評価が非常に困難なためと考えられる。研究ではないが市町村の事業として飲酒対策（適正飲酒の普及）を実施している事例がある。新潟県北蒲原郡紫雲寺町は、新潟県の北部に位置する人口約 8000 人の町である。紫雲寺町では、飲酒者の頻度が男女とも県平均や全国平均より高かったため、適正飲酒普及活動として「休肝日バッジ運動」が計画・実施されている。このバッヂは、それを示すことによってその場の雰囲気を壊すことなく、休肝日を取れるように配慮された小

道具である。町をあげてこの運動の普及に努めた結果、2004年6月現在でピンタイプ1791個、缶タイプ1898個が配布されている。本事業は、地域住民を対象とした貴重な適正飲酒普及活動の実例であり、今後、更なる普及と発展が期待される。本活動の詳細は公衆衛生情報誌で公表されている（5）。

3) 今後の研究の方向性

今後、飲酒をターゲットにした保健事業を展開していく上で必要とされる研究には以下のようなものが必要とされる。

①現在リスクのない大量飲酒者を対象としたハイリスク・アプローチ

これは文献1)で行われている研究の延長線上に位置する研究になると思われるが、実施される集団は職域だけでなく、地域、学校、医療機関での診療の場が考えられる。現在リスクを有さない（アルコール依存症や高血圧がない）対象者を想定するため、短時間で実施可能なプログラムが望まれる。基本的には適量飲酒の社会規範（Perceived Norms）を理解させて、自分の飲んでいる飲酒量が適量でも安全でもないことを理解させていく手法が主流となる。特に日本人男性の飲酒量は諸外国に比して多いため（6）、国際的な視点も含めて“自分の飲んでいる量は適量ではない”ことを周知させることが重要である。具体的には、文献レビューした中で Senftらが実施したような診療所や集団健診の場を利用した low-intensive で短時間の介入を行う無作為化比較対照試験が必要と考えられる。現在リスクのない大量飲酒者にまず“病識”を持ってもらうことが必要であり、それだけである程度の介入効果が期待できることは今回の文献レビューの結果からも明らかである。

②集団全体を対象とした適量飲酒に関するポピュレーション・アプローチ

これは文献4)で行われている方法の延長線上に位置すると思われるが、文献4)では飲酒への介入について純粋な対照群がないことと、地域での介入手法として用いることが困難な点が研究手法上の課題として残されている。文献レビューした Wagenaarらの研究のような地域介入を行うのが理想的であるが、地域介入の場合、対照群の設定が非常に困難である。適量飲酒に関するポピュレーション・アプローチの主な目的は、適量を超えて飲んでいる人（危険因子は有していない者）に自らの行為が“リスク”であることを認識させると同時に、現在、飲酒習慣のない未成年者等に正しいPerceived Norms を身につけてもらい将来の大量飲酒者の出現を防ぐことがある。したがって、①の研究手法と組み合わせ、a. 現在リスクのない大量飲酒者を対象としたハイリスク・アプローチのみを行う地域（対照地域）と b. ハイリスク・アプローチに加えて適量飲酒に関する地域や学校への啓発活動（ポピュレーション・アプローチ）を行う地域（介入地域）の2ヶ所を選定し（地理的に離れ、気候条件や飲酒量が似たところが理想的）、ハイリスク・アプローチについては観察研究的な評価（もしくはハイリスク・アプローチの対象者だけでRCTのデザインを組む）を行い、同時にハイリスク・アプローチへの参加率やその有効性が、ポピュレーション・アプローチによって改善されるかを介入地

域と対照地域で比較するという手法が考えられる。両群ともきちんとしたハイリスク・アプローチを提供するか、対照地域でも時間差をつけてポピュレーション・アプローチを実施するというデザインとすれば、対照地域として手を挙げる場所を得ることは可能と考えられる。

終わりに

今までの飲酒をターゲットにした保健事業は、精神保健としての依存症対策、高血圧などの危険因子の増悪因子としての対策が主体であった。しかし健康日本21の精神に則るのであれば、顕在的なリスクを持たない飲酒者を適正飲酒に導くようなハイリスク・アプローチとポピュレーション・アプローチを組み合わせた研究が必要である。

文献

- 1) 川上憲人、高尾総司、「適正飲酒の行動的介入プログラムの開発と効果の評価」に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金がん予防等健康科学総合研究事業. 行動科学に基づく簡便な生活習慣改善プログラムの開発と効果の検討(主任研究者 足達淑子). 平成15年度研究報告書.
- 2) 高尾総司、川上憲人、山津幸司、他. 職場における適正飲酒の行動介入プログラム—試行結果の報告—. 産業衛生学雑誌 2004; 46 (臨時増刊号) : 428.
- 3) Okamura T, Tanaka T, Babazono A, et al. The High-risk and Population Strategy for Occupational Health Promotion (HIPOP-OHP) study: study design and cardiovascular risk factors at the baseline survey. J Hum Hypertens. 2004; 18: 475-485.
- 4) 岡村智教. 成人に対するアルコール健康教育. 平山宗宏、高石昌弘、石井裕正監修. 「アルコールと健康」ハンドブック. (社) アルコール健康医学協会(東京)、2005.
- 5) 長谷川 満. 健康紫雲寺21の“休肝鳥バッジ”でおいしく飲んで長生きしよう. 公衆衛生情報 2002; 10: 28-31.
- 6) 上島弘嗣. 日本人の飲酒量は少ないか: INTERMAP より. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 2005; 40: 27-33.

論文名	Targeting misperceptions of descriptive drinking norms: efficacy of a computer-delivered personalized normative feedback intervention.						
著者	Neighbors C, Larimer ME, Lewis MA.						
雑誌名	J Consult Clin Psychol. 7 2 卷 3 号 pp 4 3 4 – 4 7 発行年 2 0 0 4 年						
対策の種類	<input type="checkbox"/> 地域全体への対策 <input checked="" type="checkbox"/> ハイリスク個人への対策						
研究の種類	<input checked="" type="checkbox"/> Efficacy研究 <input type="checkbox"/> 有効性研究 <input type="checkbox"/> 保健事業の実例						
対象の地域	<input type="checkbox"/> 国内	<input checked="" type="checkbox"/> 国外(米国)	対象者性別	<input type="checkbox"/> 男性	<input type="checkbox"/> 女性	<input checked="" type="checkbox"/> 男女	
対象の年齢	18.5歳(平均)		調査期間	2001年			
研究の手法	介入研究: <input checked="" type="checkbox"/> 無作為対照比較試験 <input type="checkbox"/> 対照なし <input type="checkbox"/> その他 観察研究: <input type="checkbox"/> 前向き研究 <input type="checkbox"/> 断面研究						
教育の内容	<input type="checkbox"/> 脂肪	<input type="checkbox"/> カルシウム	<input type="checkbox"/> 食塩	<input type="checkbox"/> 喫煙	<input type="checkbox"/> 防煙	<input type="checkbox"/> ビタミン <input type="checkbox"/> その他	
	<input type="checkbox"/> かう	<input type="checkbox"/> エネルギー	<input type="checkbox"/> サプリメント	<input type="checkbox"/> 運動	<input type="checkbox"/> 肥満	<input checked="" type="checkbox"/> 飲酒 ()	
病態の内容	<input type="checkbox"/> 高血圧	<input type="checkbox"/> 高脂血症	<input type="checkbox"/> 糖尿病	<input type="checkbox"/> 訪問指導	<input checked="" type="checkbox"/> 多量飲酒		
研究デザイン (介入研究の場合プロトコールとして介入の期間、間隔、頻度、対照群の内容を明記のこと) 無作為化比較対照試験。ベースライン調査後、ただちにパソコンのモニターで飲酒習慣に関するPersonalized normative feedback(個人的規範のフィードバック)を主体にした教育を行う。3ヶ月後、6ヶ月後に、飲酒に関する自己認識規範(Perceived norms)と飲酒量の変化を調査し、対照群と比較する。介入群、対照群ともに大学の心理学部の学生で大量飲酒の既往がある者。							
研究の要旨 米国北西部の大学の心理学部の学生 1,115人のうち、研究への参加意思があり1ヶ月以内に少なくとも1回の大量飲酒(1度に4~5 drinks)の既往がある男女 252人を無作為に介入群(パソコンによる Personalized normative feedback) 126人と対照群 126人に割り付けた。ベースライン時に、飲酒に関する自己認識規範、飲酒習慣(飲酒量や飲酒関連の問題行動)、社交的な面での飲酒理由等について調査された。介入群は、ベースライン調査後、ただちにパソコンのモニターで飲酒習慣に関するPersonalized normative feedback(個人的規範のフィードバック)を主体にした教育を行った。モニターの画面はプリントアウトすることによって本人に手渡した。具体的な指導内容は、一般の学生と介入群被験者の飲酒規範や飲酒量を比較して示したり、飲酒量の順位を提示したりして、被験者自身の飲酒に関する規範を同年代の学生と比較してフィードバックするようにした。介入群、対照群とも3ヶ月後、6ヶ月後にベースラインと同様の調査を実施し、飲酒に関する認識規範(Perceived norms)と飲酒量の変化を比較した。その結果、Personalized normative feedback は、飲酒に関する自己認識規範を変化させ、実際に飲酒量を減少させるのに有効であった。この介入効果は、3ヶ月後の時点で、社交的な理由で大量飲酒をしている者により有効であることが示された。							
研究の結論 パソコンを用いた飲酒習慣に関するPersonalized normative feedback(個人的規範のフィードバック)を主体にした健康教育は、飲酒に関する自己認識規範の変化や飲酒量を減少に有効である。							
研究の長所・短所 指導者ではなく、同輩の行動様式(本研究の場合、大学生)を学び自らの行動や規範を振り返ること(フィードバック)は有効な健康教育の手法であり、本研究それを大量飲酒に適用したRCTである。ただし結果の記載が、多種多様なスコアとの相関係数のみで示されており、研究成果をその他の集団へ演繹した際の効果がわかりにくい。							
整理番号							複数選択可

論文名	Education of key personnel in student pubs leads to a decrease in alcohol consumption among the patrons: a randomized controlled trial.					
著者	Johnsson KO, Berglund M.					
雑誌名	Addiction 98巻 5号 pp 627-33 発行年 2003年					
対策の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 地域(大学)全体への対策		<input type="checkbox"/> ハイリスク個人への対策			
研究の種類	<input type="checkbox"/> Efficacy研究		<input checked="" type="checkbox"/> 有効性研究		<input type="checkbox"/> 保健事業の実例	
対象の地域	<input type="checkbox"/> 国内	<input checked="" type="checkbox"/> 国外(スウェーデン)	対象者性別	<input type="checkbox"/> 男性	<input type="checkbox"/> 女性	
対象の年齢	22歳(平均)		調査期間	記載なし		
研究の手法	介入研究: <input checked="" type="checkbox"/> 無作為対照比較試験 <input type="checkbox"/> 対照なし <input type="checkbox"/> その他 観察研究: <input type="checkbox"/> 前向き研究 <input type="checkbox"/> 断面研究					
教育の内容	<input type="checkbox"/> 脂肪	<input type="checkbox"/> カルシウム	<input type="checkbox"/> 食塩	<input type="checkbox"/> 喫煙	<input type="checkbox"/> 防煙	
	<input type="checkbox"/> カリウム	<input type="checkbox"/> エネルギー	<input type="checkbox"/> サプリメント	<input type="checkbox"/> 運動	<input type="checkbox"/> 肥満	
	<input type="checkbox"/> ビタミン <input type="checkbox"/> その他 <input checked="" type="checkbox"/> 飲酒 ()					
病態の内容	<input type="checkbox"/> 高血圧 <input type="checkbox"/> 高脂血症 <input type="checkbox"/> 糖尿病 <input type="checkbox"/> 訪問指導 <input checked="" type="checkbox"/> 常用飲酒					
研究デザイン(介入研究の場合プロトコールとして介入の期間、間隔、頻度、対照群の内容を明記のこと) 無作為化比較対照試験。12の学生組合が運営している12のパブを学生組合の規模をマッチさせて6ずつ の介入群と対照群に分けて、介入群のパブのバーテンダー(学生)に5回のレクチャーを実施。1ヶ月後にパブ 利用者の呼気中のアルコール濃度とパブの雰囲気を比較する。						
<p>研究の要旨 スウェーデンの大学生は皆、12の学生組合(student nations)のいずれかに所属している。学生組合は様々な娯楽の提供もしており、その中にパブの運営も含まれる。Lund大学で学生組合が運営している12のパブでベースライン調査を実施し、午後11時から午前1時の間に利用者664人の呼気中のアルコール濃度と利用者が感じるパブの雰囲気(rowdy, cozy, high)を調査した(雰囲気はvisual analogue scaleで判定)。次に学生組合の規模をマッチさせて12のパブを無作為に2群に分けた。介入群のバーテンダーの主要メンバー(学生)40人に対して、飲酒の効用と害についての講義を実施した。講義は飲酒の生理学や有害性などを教える60~120分の Lecture1~4、泥酔状態の客への給仕をうまく断る方法などを教える360分の Lecture5から構成されていた。講義終了後、1ヶ月経過後にベースライン調査と同様にパブ利用者658人の調査を実施した(対象者はベースラインとは異なる)。介入群のパブ利用者の呼気中のアルコール濃度は、対照群に比べて0.011%低かった(95%信頼区間: 0.000~0.022)。またパブの雰囲気を rowdy(騒々しい)と感じた者の割合は介入群では7%減少したのに対し、対照群では1%の減少であった(差は-6%、95%信頼期間: -11~-1)。 </p>						
<p>研究の結論 学生パブの給仕者(バーテンダー)個人を対象としたトレーニングプログラムは、飲酒量を減らし、パブの騒々しい雰囲気を緩和する手段として有用である。 </p>						
<p>研究の長所・短所 パブの給仕者に介入することによって飲酒習慣への介入を試みたユニークな研究である。しかし介入を実施したのは学生組合が運営するパブであり、スウェーデンの大学以外の一般集団に応用できるかどうか不明である。 </p>						
整理番号						複数選択可